

暴かれる朝鮮戦争時の惨劇

「ノグンリ虐殺事件 君よ、我らの痛みが分かるか」を読んで

下山 房雄

札幌の出版社＝寿郎社が昨08年12月に出版したこの本（鄭チョン殷溶ウニョン著 伊藤政彦訳 松村高夫解説 A5判 328頁 本体3000円）を私の近い友人戸塚秀夫（英米日労働問題研究家）から教わって読んだ。02年9月の現地調査も踏まえこの本の解説＝紙幅25頁を書いた松村高夫（イギリス労働史および731部隊など満州朝鮮問題の国際的権威）と近い戸塚が本を手にして私に勧めたのである。

ノグンリ（老斤里）虐殺事件とは、朝鮮戦争勃発後一か月の7月26日午後から29日朝までの60時間、ソウル南160キロの小村ノグンリを走る鉄道＝京釜線の土手の下の双子トンネル内に逃げ込んだ南下途中の避難民を米軍が執拗に銃撃し多数殺傷した事件だ。著者チョン・ウニョンの幼児二人もそこで殺された。私は1950年10月以降の米軍の38度線を越えての北進のもとで、いくつかの共和国人民殺害事件が起こされたことは、アタマに入れていたが、7-9月に南朝鮮各地で韓国避難民の殺害事件があったことを具体的に認識していなかった。朝鮮韓国問題についてはかなりアンテナを張っているつもりなのに、本書を読んで大事なことを知らないできたとの感を深めた。

事象の認識は、経験以外はメディアを通じて行うほかない。しかし、当然ながらメディアに登場するか否か、どのように登場するかは諸条件に依存する。この事件は、7月29日夕にトンネルに入ってきた共和国人民軍の「解放」によって終止符を打たれ、その従軍記者全旭の死体目撃報道が8月19日付けの「朝鮮人民報」でなされている。しかし「西側」の我々にそれが届くことはなかった。本書著者チョンが、小説の形で朝鮮戦争の経過の中でのこの事件を告発的に公けにしたのは、韓国民主化後の1994年4月。著者が言う（本書4頁）ように「この惨たらしい事件は歴史の裏側に44年間も隠されて」きた。この94年本が、小説というより実録だと理解したAP通

信ソウル支局員チェ・サンフンが著者に接触（98年4月）、それから1年半のAP通信記者たちの精力的調査が、99年9月28日の配信に結実した。そのAP通信がニューヨークタイムズなどに掲載され、事件は漸く世界的に公（おおやけ）になった。日本での報道もポチポチなされることになったが、私は松村が『世界』05年6月号に発表した「朝鮮戦争下、老斤里虐殺事件の真実」も知らずにいた。そして本書日本語版の昨年末の出版、年が開けて2月27日の共同通信ソウル発の85歳著者写真入りのそのことの報道も知らずにきた。だが感性の鋭い友人の存在のおかげで本書を読んだいまの私は、多くの人に薦めたいと思っている。

本書本文の最初の頁で「1948年12月、私が済州島に出動して帰った直後のこと」、続いての頁で「共産主義者らが警察官とその家族を手当たり次第に殺傷している時勢」といった叙述に出合っただけで胸がざわつく。金石範『火山島』全7巻や趙廷来『太白山脈』全10巻読書で形成されている私のイメージとその叙述が衝突したのだ。しかし著者チェが切々と書く済州島・智異山「共産ゲリラの残虐な蛮行」や朝鮮戦争での共和国側人民裁判での処刑の無残な事実は、彼我の報復合戦の一コマとしては全く嘘というわけでもないだろうと受け止めつつ読み進む。著者チェは済州島で目撃した「燃えている我が家を後にして、男は荷物を背負い、女は頭のにせて山を下った山村の住民たちの悲惨な行列」を目に浮かべる中で警察官職業に対する懐疑を抱き（29頁）、朝鮮戦争勃発時にはソウル中央大学学生となっていた。そして共和国人民軍の南進のもとで一日でも警察官だった者はすべて銃殺されるとの噂で妻子を置き釜山めざして避難していった。残された家族がノグンリの事件に出遭い、重傷を受けたが生き残った妻からの聞き取りでその事件の叙述を行っている。

（寄稿 神奈川県海老名市）